

## D.H.Lawrence の『虹』における回帰する自然

## — 歴史、神話、成長物語 —

吉岡 範武 (子ども心理学科・講師)

Returning “Nature” in D.H.Lawrence’s *The Rainbow*:  
History, Myth, Bildungsroman

Noritake Yoshioka

## Abstract

This paper is to discuss *The Rainbow* written by D.H.Lawrence. In Chapter I, I argue against a Marxist’s critical essay which points out the lack of history in Lawrence’s apparently historical novel. In Chapter II I shed light on a possible feminist reading for *The Rainbow* especially in the postmodern age. In both chapters “myth”—the Marxist’s very target of criticism—is shown to return, through the private sphere of man-woman relationships, and relativize “modern” framework of telling history. In Chapter III, I discuss the language characteristics of *The Rainbow* in relation to what I have clarified in Chapter I and II.

Keywords: modernism, D.H.Lawrence, physicality

キーワード: モダニズム、D.H.ロレンス、身体性

## 序文

ロレンスの二作目の長編小説として一九一四年に上梓された『虹』は、一八四〇年から一九四〇年にいたる、イングランドの産業化と、社会的発展の進行した時代を歴史背景とし、片田舎コスゼイを地理的舞台とした、ブラングウェン一家の三世代に渡る大河歴史ドラマとして構想された。自然に根ざした共同体を舞台とする、イギリス、パストラル小説の伝統に立ちながら、その遠景に、進行する近代化の波を予感させるところから語り始められる本作品は、その中に、文明/自然、歴史/神話、男/女、家族/社会などの対立構造をもち、六十年代以降急速に発達した文学理論の批評的欲望を刺激するだけの、矛盾と豊穡さをあわせ

持つ作品である。また本作品は、第一次世界大戦以前に構想、執筆された作品でありながら、戦争勃発後に推敲されたことにより、その影響が特に最終章に関して指摘されている。しかし、後にリーヴィスによる批評により確立された、機械文明と帝国主義の呪縛の中、生の復権に叫び声を上げる預言者ロレンスのイメージはすでに、テキスト中、いくつかの主だった箇所において、その姿を明確に現しているといつてよい。

大地に根ざした農耕生活の中で、自然との一体感の中に生きる第一世代から、社会的活動半径を拡大して行く、第二、第三世代へと時代が推移する中で、プライベートな空間で繰り返される男女の葛藤と結びつきという主題が、それを取り巻き

変化する、社会環境、時代的エートスとの関わりの中で変奏される。そのような構造ゆえに、またこの小説は、その後、歴史に関わる部分では、マルキシズム批評の批判対象となってきたのと同時に、他方で、そこで前景化されるプライベート空間の中に、また、女性の社会進出というテーマとともに、フェミニズム批評に関わる諸問題と反響しあう要素を包含している。

本論考においては、第一章において、**Holderness**によってマルクス主義的観点から提出された、歴史小説『虹』の「歴史性（＝歴史的リアリズム）」に対する疑義を取り上げ批判的に考察する。**Holderness**の議論に対しては、すでに**Kinkead-Weeks**が『虹』に見られる歴史記述のディテールに至るまでの正確さを裏付けることで、歴史小説『虹』のリアリズムを擁護する議論を展開している。しかし、歴史のリアリズムをめぐる**Holderness**の議論は、もともと、歴史考証性の次元にあるというよりは、歴史認識の問題をめぐるものである。すなわち歴史を語る行為そのものの中で、その目論見を頓挫させてしまうブルジョア美学のイデオロギー的幻想作用を摘出し、テキストそのものを、それが隠蔽する真の歴史（経済的下部構造としての歴史条件）の中に差し戻すこと、**Holderness**が提示した『虹』に対するの疑義の真意はそこにあるだろう。それゆえに本論稿における**Holderness**の議論の考察は、それが批判の対象とするロレンスの神話空間を、イギリス近代化の歴史過程という背景、そしてヴィクトリアニズムが崩壊する、ロレンスの生きた二十世紀初頭のモダニズム空間という前景の遠近法の中においたとき、それがどのような位相のもとに浮かび上がるかを検討し、それによりイデオロギー批評そのものを相対化し、『虹』のなかで、この神話空間が指し示す読解の可能性を掬い出すことを目的として行なわれることとなる。

第二章においては、アーシュラの成長物語に焦点をあてて考察し、フェミニズム的視点を視野に収めながら、さらにそれを先に進める読解の可能性をさぐりたい。ブルングウェン一家の三世代にわたる物語は、イギリスにおける近代化の歴史過

程を反映するとともに、社会進出を果たす第三世代のヒロイン、アーシュラを前景化する女性史という側面をもあわせ持っている。父権性社会の中で囲い込まれる余剰としての女性、そしてその主体回復という主題が、抑圧されたものの復権という文脈でマルクス主義批評の歴史意識と共振しながら、「主体」と「権利」概念に支えられた、新たな近代的言説を紡ぎだしていくとともに、そのような近代主義そのものの外部へと導くベクトルをその内に生み出していく点に着目したいと考えている。一章、二章を通じて、それら二つのテーマが交錯し結節する場所として、「自然の回帰」が論じられることになるだろう。第三章においては、第一、二章で浮かび上がった論点をめぐり、本テキストの、言語と語りの特徴に光をあてたい。そして、それらの考察の過程で得られる成果を、可能な範囲で、二十一世紀現代というテキストの読解へとつなげる－いわば、ヴィクトリアニズムとモダニズムという遠近法を備えた『虹』というテキストを見ながら、同時にそれによって見られている二十一世紀という「こちら側」にいる、わたしたち読者が生きる世界を浮かび上がらせる－思考の道筋を見出せればと考えている。

## 一章 『虹』の歴史性

墮落以前の楽園の記憶、霊肉一致のギリシャ精神の復興、失われた始原への情熱、潜在的過去に浸透された現在に生きる人間は、つねに未来へと向かって遡航する。あるいは未来へと投企する中で、過去が言及、再演される。十九世紀に、ネイション・ステイツが語った啓蒙、進歩主義、帝国主義神話は、創出された国家伝統にイデオロギーの源泉を見出した。そして、そのイデオロギーに内在した拡張主義の帰結としての、第一次世界大戦後の秩序崩壊の時代に生きたイギリスのモダニストたちは、マルキシズム、ファシズム、キリスト教保守主義、未来主義、芸術至上主義など、その秩序の裂け目から姿を現したあらゆる政治、思想傾向の諸力が闘ぎ合う空間の中で、みずからの新たな神話探しの旅に出た。

そして人間関係や社会のあり方、あるいはその

基礎となる人間の探求において新たな可能性が手探られる中で、「ジェンダー」、「性」、「階級」、「無意識」、「身体」などヴィクトリア朝ブルジョア社会の中で抑圧、隠蔽されていたさまざまな要素が、時代を開き活性化するための、新たなヴァイタリティーの源として、芸術、思想、文学の中にとり上げられ、積極的に姿を現すようになる。ロレンスの生きたのはそのような時代だった。

このような言語空間にあって、一九八〇年代に **Holderness** が唯物主義的な観点から提出した、『虹』の社会的、歴史的分脈の欠如への批判的指摘は、歴史記述がそもそも神話やイデオロギーから完全に自由でありうるかという、新歴史主義批評によって提出された、歴史記述をめぐるアボリアを議論の中に呼び込み、他方で、モダニズム時代に特徴的な、言語への過剰なまでの自意識、そしてそれに伴う表出と隠蔽をめぐる問題群へと反響する。そこでは歴史を「語る」行為自体が、すぐさまそれを解体しようと働く、複数の潜在的「歴史」の解体的な力にさらされるような、極めて言語転倒的なダイナミズムに晒された場所であり、「ジェンダー」、「性」、「階級」、「無意識」、「身体」などの、人文諸科学において、二十世紀以降の時代を読み解く新たな鍵概念と目されるようになる領域が、歴史の書き換え、あるいは、その補完への可能性を示唆する新たな源泉として、表舞台に登場する時代でもあった。**Holderness** が投げかけた問いかけもまた、このように種々の転倒的な観点を潜在させた時代状況の中に『虹』というテキストを差し戻すことで、再考察される必要がある。おそらくそこに、単なる考証性や歴史観に基づく歴史批評ではなく、歴史意識そのものを歴史化する批評への道が見出せるだろう。

**Holderness** の議論は、「生」の擁護者としてロレンス評価を確立させたリーヴィスによる『虹』に対する批評—「個人の生活への比類なき洞察を伴ったイングランドの社会史的記録」—にたいするアンチテーゼとなっている。彼は *D.H.Lawrence: History, Ideology and Fiction* において、『虹』が歴史小説と呼べるかどうかについて端的に疑問を投げかける。彼の批判は主に、ヨー

マンであるブラングウェン一家が大地との「血の交歓」に生きる農耕生活を描写したマーシュ・ファームという空間の持つ神話性、そしてリアリズムを離れ、彼が「分析的であり」「抽象化された」と述べる反リアリズム的方向に変化した炭鉱町の描写に対して向けられる。以下が、彼が神話だと述べる『虹』の冒頭部および、炭鉱町ウィギストンの描写からの引用である。

日々膨張していく町を控え、豊沃な、しかも自家所有の土地に住んで、彼らはもういつのまにか窮乏時代のことは忘れてしまった…勤勉に働くのも、むしろ一種彼らの生命的衝動からであって、決して金のためではなかった…彼らの周囲では、天も地も生命に漲り湧いていた…天と地の交わり、それを彼らは知っていた。日光は大地の胸、腹の奥深く浸み通り、雨は昼間空高く吸い上げられる…これが天と地との生命の交流だった…応答もなくひろがる大地—その大地の鼓動と肉体とを、そのまま彼らは感じとるのだった。(『虹』上巻8)

[炭鉱町は]妙に廃墟のような荒涼さを感じさせた(中略) ガランとした街々の厳酷さ、一切が様に無気力に沈滞している様子、それは、生よりも死を思わせる(中略) あたり全体が、まるで夢か幻のようだった(中略) まるで、それは、なにか気味悪い夢、なにか醜い、朦朧たる死の気分が、そのまま具体化したもののように見えた。(『虹』中巻269-270)

**Holderness** は、マーシュ・ファームという非歴史的な場所は、炭鉱町ウィギストンという場所の、反リアリズム的空虚—それを見せるのは、ラスキン流の「非人間化された労働」、機械が支配する世界において従属的位置に貶められた人間生活への恐怖と反発により、そこから距離をとろうとする視点ということになる—から、その空虚を埋めるために、過去に投げ返された、有機社会という名のユートピアであり、言い換えれば、炭鉱町ウィギストンを、距離をとった外側から「悪夢」として語るイデオロギーが、理想郷的有機社会という

イデオロギーにすげ替えられているに過ぎず、それゆえ『虹』はイングランドにおける社会史の記録として読むことは出来ない、と批判するのである。そして彼は、『息子と恋人』のリアリズムから『虹』の象徴主義への変化を「進展」と捉えたEaghtonの解釈に異を唱えながら、あらゆる歴史記述に隠蔽作用がつきまとうことは避けられないにしても、そこには程度の差があると指摘する。さらに、もう一つ重要なのは、ブルジョア産業社会への嫌悪がもたらす現実逃避は、逆説的にブルジョア・イデオロギーの美学と共犯関係を結んでしまうという彼の主張である。

The rural 'village' society is a 'poem' because within it imaginative needs and all contradictions are resolved. There is a complete circuit in which aspiration is automatically fulfilled, a complete harmony of parts corresponding to the bourgeois conception of aesthetic perfection... This model of society is a myth in the strictly philosophical sense: an ideological harmonizing and resolution of real social contradictions. (Holderness 141)

マルクス主義批評家たちの視点から見れば、十九世紀におけるアーノルド流の教養主義や文化崇拜は、社会が抱える矛盾や不満を、かつての宗教になりかわり、手なづけ、回収する役割を背負わされた、宗教零落の時代における美的代替宗教なのであり、ブルジョア社会の存続に加担するそのイデオロギー性ゆえに指弾の対象となるわけだが、このようにテキスト内部に美的に昇華・隠蔽された「矛盾」を、「現実」にあるいは「歴史」に引き戻そうとする政治的読解への衝動は、その主観主義/客観主義、テキスト主義/歴史主義、という対立構図のもと、二十世紀に入っても、F・R・リーヴィスやI・A・リチャーズを源流とするニュークリティシズム批評が拮定した、自己完結したテキスト世界ークリアンス・ブルックスの「よくできた壺」という比喩はうまくそのイメージを伝えている—に対する、その後の歴史主義の反発、近いところでは、デリダの脱構築的読解のテキスト

主義が導く非政治性に対する、サイードの批判などの形で繰り返し表れてきた。それは国家の設える制度やまなざしの中で、いとも容易に、文化主義、また国家主義—それはまさに牧歌的想像力を源泉の一つとしている—などに収奪される、超越への欲望が辿る末路、あるいは、その否定形において、その体制側の政治支配を強化してしまう、非政治・芸術・テキスト志向性の精神運動が描くパラドキシカルな軌跡に対して、階級あるいは、西洋/非西洋の対立など、歴史内部の「もの」に裏づけされた問題意識から投げかけられる、挑戦と、問いかけという性質をもっていた。

ロレンスを大きく取り囲む、モダニズム芸術の一般的傾向においても、それは現実の政治に背を向けた、芸術至上主義の風潮をその一側面として持っており、一般大衆に媚びない芸術の高度化と難解化によって、それは、アーノルド流の文化エリート主義を受け継ぐ側面を持っていた。しかしロレンスの描いたマーシュファームはおそらく、現実の不足分として過去の空間に縁取られた理想郷の牧歌的絵画あるいは、ブルジョア芸術風に美的加工処理を施された神話的幻想空間なのではない。それは現在に常に干渉、侵入し、世界と歴史に問いかけを続ける審級なのである。

Holderness がイデオロギーとして批判する、労働者の住む炭鉱町の外部へ設定されたテキストの視点は、(トムが炭鉱経営者であるだけでなく)アーシュラが女性であるという事実によって生じているのだが、忘れてならないのは、第二章で論じることになる、アーシュラの成長物語の中で重要な役割を果たし、アーシュラの視線に寄り添いながら、「内側」から語られることになる、小学校という職場環境の描写である。それは、リアリズム手法で貫かれ、「個」を描きながらも、極めて「労働階級的」な集団性への萌芽を持っている。

『虹』における、このリアリズムと反リアリズムという二つの要素の混在に関しては、その反リアリズム的語りと神話空間の存在が、リアリズム空間の不足分を美的に回収する空間として機能することで、Holderness が主張するように、リアリズムそのものの中にある矛盾＝歴史を覆い隠すと

考えるのか、またはリアリズムは、反リアリズム空間の存在によって、はじめて、歴史的に定位されると考えるかにより、評価は分かれてくるだろう。それゆえ、そもそもロレンスのテキストにおいて、「神話」が持つ位相が重要な問題となってくる。そして、歴史と接触しない神話という Holderness の議論—なぜなら、彼の論理にしたがえば、そもそも『虹』の中に、階級闘争に結びつく歴史的モメントそのものが存在せず、それだからこそ、その空虚を埋めるために過去に神話空間が縁取られている、ということになるからなのだが—に対し本稿の提示する議論は、その神話と歴史の切り結ぶ、弁証法的な次元にこそ、ロレンスのリアリティー、さらに言えば歴史意識は存在しているというテーゼに立つものである。ロレンスの神話空間の理解において、『聖書』への引喩は一つのヒントを与えてくれるものである。Salgado は『虹』の中に埋め込まれた創世記との相似性について次のように述べている。

Lawrence's novel is also, in intention at least, something more than imaginative social history. It aspires to the condition of myth: that is it attempts to capture the essential rhythm of human experience not only in relation to fact and history, but in a larger relation to a trans-temporal order of thing... Lawrence more or less consciously casts the novel into the framework of a modern Genesis myth. The parallels between Lawrence's novel and biblical myth exists at many levels, from the structural to the stylistic. (Salgado 110)

『虹』と『旧約聖書』（特に創世記）との相似性を考える際、ここに指摘された、いくつかの側面に加えて、「自然」という審級の持つ意味は重要である。すなわち、創世記の楽園神話が墮落以前の神と人間の関係のありかた、そして楽園追放という、永遠に過ぎ去った「始原」の物語から、その後の旧約時代の「歴史」を説き起こしているように、『虹』冒頭の自然との交歓に生きるブラングウェン家の人々の姿は、まさに歴史と神話が交

わる場所として構想され、初期設定されている。そして、ユダヤ教の神が、歴史に介入したように—その意味で旧約の世界はまさに神を超越審級として繰り返される、人間の側の離反と立ち返りの歴史である—『虹』の神話空間は歴史の内部に回帰する、ブラングウェン家の三世代にわたる、葛藤と融合の体験が織り成す男女のプライベート空間を通じて。

ここで気をつけておくべきことは、歴史、神話は、必ずしも Holderness が言うように、接触しない二つのカテゴリーとして静的に配分されているわけではなく、それぞれが交わり、重なり合う場所にロレンスの「経験」はその足場を持っているということである。ロレンスにとって歴史を語ることは、身体性に基づいた、この「経験」を抜きにしては考えられないことであり、彼の精神活動の領域は、その「経験」から出発して、男女の葛藤と結びつきという主題を探る、一連の小説における試みから、西洋文明の歴史的展開と未来を彼独自の形而上学的視点から捉え直す、『王冠』『トマス・ハーディー研究』などの試みにまで至る、非常に大きな振幅を伴ったものだった。そのような射程をもつ彼の文学テキスト、また形而上学的テキストにおいて、ロレンスの経験が宿る「身体」という場所は、人間行動の自由や合理性を前提とするリベラル・ヒューマニズムの神話がブルジョア的主体を定立させようと個人に投げかけるまなざしからも、拡大された経験主体として集団性を想定するマルクス主義的な観点からも、死角となる。ロレンスのテキストにおいて、「身体」および、そこに足場を持つ経験の領域が、しばしば、「闇」として言い表され、姿を現すことの理由はそこにある。

代用教員としての生活を描くリアリズム手法と、炭鉱の描写にみられる反リアリズム手法との混在は、以上のような、ロレンスの経験を支える前提条件の表出なのであり、反リアリズムの「夢」の背後にあって、それを生み出す力について、二章においてより詳しく論じることになる。ここでは、ロレンスの生きたモダニズムという文学的エポックそのものが、自然、社会、人文諸科学と親

和性をもちながら、十九世紀のエピステーメのただ中に産み落とされたヴィクトリア朝リアリズムに対する転倒的衝動を強く秘めた言説空間であったこと、そしてロレンスが『息子と恋人』のリアリズムから、『虹』の、神話的、象徴主義的スタイルへと移行した経緯そのものが、十九世紀的世界を規定した、歴史/進歩や、植民地支配/啓蒙など、帝国主義を支え正当化した諸観念の結びつきの総体、そしてそのイデオロギー機構の中で産出された「客観的」歴史記述という脱魔術化の過程で失われた「私たちはどこから来たのか、何者なのか、どこへ行くのか」という始原に関わる、根源的な問いの回復というテーマに結びついていたことを指摘しておく。

以上のことから、『虹』において、神話空間という「歴史、社会的分脈の欠如」が、客観的歴史言説という指定された参照枠からの「不足」あるいは「隠蔽」として規定されるのではなく、むしろその客観的歴史を語る権力や、それにまわりつく神話、イデオロギーを内側から攪乱し転倒させるだけの力強さを秘めた「余剰」として現象しているといえよう。

ある時代において、歴史記述から疎外されていた余剰—「プロレタリアート」や「女性」—はつぎの時代には自らを語り、新たな歴史を生み出す主体として歴史の表舞台に登場する。ロレンスの「余剰」はこれら前時代におけるジェンダー的、あるいは階級的余剰が復権の声を上げる政治的動きとどのように交錯するのであろうか。次章において、本テキストの中に読みとれる、「余剰」の問題を、フェミニズム的主題系との関わりで考察する。

## 二章 アーシュラの成長物語

現在という歴史の先端に芽生える政治的欲求は、新たに発見された知のフロンティアと合い結び、以前には見出すことのできなかった、あるいは語ることでできなかった新たな視角からの歴史の読み直し、語りなおしを生み出すものである。アーシュラの成長物語を軸とする女性史の一ページとして読むことができる『虹』は、先に論じたマルクス

主義批評的視点からみた階級問題と重なる形で、フェミニズム的主題系に連なるいくつかの視点を内在させてもいる。70年代にケイト・ミレットの『性の政治学』で示された、*The Plumed Serpent* の「男根中心主義」への弾劾を嚆矢として始まるフェミニズム批評は、その後、理論的發展を経ながら、ロレンス作品内に存在する複数の voice を評価する好意的なものへと時代とともに変化する。それは、男女のプライベート空間というきわめて権力的な場を舞台としながら、そのような権力的構造そのものを脱構築するベクトルをその中に織り込んだテキストの深層を発見していく過程だったといえるかもしれない。

『虹』そのものは、ロレンスの後期の作品と比較して、もともとフェミニストたちの批判にさらされるような要素が少ない作品ではあった。フェミニストの父権性批判に直接接続できるような視点がテキスト内に顕在化していることなどもその理由の一つかもしれない。しかし、それらの視点はさらにそれを踏み越える地点にまで読者を導くような意味生成の場の中に存在しているという言い方ができるかもしれない。そこには一章でとりあげた、回帰する自然が顔をのぞかせる。本章においては、アーシュラの社会的経験と認識の変化がたどる軌跡が、イギリス文学における女性主人公の成長物語の系譜の中で、このテキストに特有の「自然」の作用を背景に、いかなる曲線を描くかについて、フェミニズムの主題を視野におさめながら探してみたい。

テキスト冒頭のマーシュ・ファームの描写において、牧師の家族や貴婦人になげかけられた女たちの憧憬のまなざしが *Victorian decency* という時代の規範世界を暗示する一方で、三世代を経て、その延長線上に展開するアーシュラの成長物語は、女性の自立の物語という新たな上昇曲線を描いている。その意味において Siegel が *Lawrence Among The Women* において指摘したように、アーシュラをイギリス文学の「ニュー・ウーマン」の伝統の中に位置づけて捉え直すことが可能である。十九世紀以来、女性を「家庭の天使」という性役割に押し込めたヴィクトリア朝社会のイデオロギー

に異を唱える、『ジェイン・エア』のヒロイン、ジェインをはじめとするさまざまなタイプの女性主人公が、生み出されてきた。しかし、アーシュラが自立を獲得する過程の描き方は、ヒロインがたどる成長物語の **convention** にのっとっているが、それを大きくはみ出す部分を併せ持っている。

アーシュラの成長物語には、ウィニフレッドとの同性愛関係、スクレブンスキーとの恋愛を始めとし、いくつもの段階や出会いが用意されているが、彼女が代理教員として勤めるプリンズリ街にある小学校での体験の描写は、自由と経済的自立、教え子との人間的交流を憧れ求めながらも、そこで経験する教員生活に対して、彼女がしだいに幻滅していく過程が、息詰まるような心理的リアリズムとともに描きこまれた重要な箇所である。「牢獄」と形容されるその小学校は、一方で、国家意志が法の形で貫徹する官僚システムの末端に位置する場所であり、同時に、人間性を剥奪する、画一的教育による大量生産が行われる「機械」に支配された空間でもある。

たくさん子どもたちを、訓練された機械のような一つの型に、いやでも応でも嵌め込もうというくだらない仕事に…教師たちは一人残らず、いやいながら駆り立てられているのだ。すべての子どもを、服従と注意の、まるで自動機械のような状態にしておいてから、さていろんな知識の断片を、命令同様に受け入れさせようというのである。

(『虹』下巻60)

ミスタ・ブランドの声に悩まされた。単調きわまる、そのくせ憎しみに充ちた、しゃがれ声だった。いったいあの男は、ただ動くに動く完全な機械になってしまっている。そのくせ本来の人間も、抑圧された摩擦の形で動いている。なんというおそろしいことだ。思ってもたまらない！わたしも、あんな風になってしまわなければならないのだろうか？

(『虹』下巻61-62)

ここに描かれている悪夢的光景は、まさにロレンスの捉えた産業社会の縮図ともいえるものである。

二十世紀に始まる大量生産のシステムを準備したのが、産業革命以降における機械の出現であったならば—そして、機械文明への呪詛こそはロレンス文学を特徴づける要素なのだが—産業社会の担い手たちを生産する工場として描かれた、小学校という教育現場もまた、機械による生産工程のイメージの中に描かれておかしくはない。一方、機械のイメージが与える硬質な感覚ゆえに、それは同時に、浸透する法＝ファルスの持つ抑圧的形能力の隠喩ともなっている。「以前ならば同情したり、理解したり、いたわってやったりしただろう過ちも、今は平気で処罰することができるように(『虹』下巻78)」アーシュラが変化していく過程が示すのは、国家意志の浸潤の中で、鑄型にはめられていくのは、生徒のみならず教師でもあるという事実である。

それは、校長と教員たち、教員たちと生徒たちの間の、意志と意志のぶつかり合いと、それに伴う、機械のきしみのような、不協和音や摩擦音に満たされた場所であり、「機械的」に作動する権力意志に押しひしがれる「人間性」の描写はまさに悪夢的である。それゆえ、ここで、アーシュラを含む教員たちと校長の関係を階級対立的に捉え、そこにマルキシズムとフェミニズムの共闘の場を見つけることもある意味では可能であろう。しかし、ロレンスのテキストは、そのような集団性へのベクトル、言い換えれば、「資本」「父権」「帝国主義」という名の近代的権力の形と、それが必然的に産み落とす政治的転倒衝動の権力闘争が繰り広げる弁証法的運動へと一直線に進むベクトルの外部へ誘う「逃走線」をそなえている。

この事実は、ミス・スコフィールドなどの、女性参政権に強い関心を示す登場人物と、それに対して、実感を持ってないアーシュラとの描き分けにより示される。そしてアーシュラの成長物語、つまり彼女が、挫折感、絶望感、そして時折訪れるわずかな達成感の間を揺れ動きながら、女性差別と闘い、自らの地歩を築く闘いに勝利するという女性史を再現・表象する物語の中核には、それと同時にアーシュラが感じる、物足りなさという「空虚」が常に顔をのぞかしているのである。

家を出て、衣食を稼ぐということによって、彼女は、自己解放に向かって、思い切って力強い一歩を踏み出した。だが、前よりも自由が獲られてみると、これはまたもっと大きな要求が、一そう深く意識されるだけだった。したいことは、実にいちじるしかった。立派な美しい本を読んで、自分を豊かにしたい、美しいものを見て、その永遠の喜びを経験したい。偉い自由な人たちにも会いたい。そんな風に数え上げて来ても、まだあとには、なにかはっきりいえない渴望が、いつも残っている。（『虹』下巻 101-102）

この「空虚」は自立を目指す、アーシュラの欲望が、すでに目に見えない、近代という名の大文字の「父親」＝ファルスに去勢（forclusion）されていることの身体的な知覚なのである。このことは非常に重要であり、20世紀初頭において目に見えるものであった仮想敵―校長の父権性の背後に、産業資本と帝国主義を推し進める官僚国家の結託した権力の姿を想像するのは難しいことではないだろうが不可視となり、権力が分散化、多様化するところに、現代のありかたの一つの特徴があるとすれば、『虹』が暗示するフェミニズム的読解はそのようなポストモダンの地平に、近代の始原に発生している空虚を対置することで、現代の読解に対する有効な視座を提供してくれるといえるかもしれない。そこで、アーシュラの主体確立の問題は、単なる男性権力主体を前提とした女性性の復権という identity politics の地平にはとどまらない。それは、アーシュラの内部にも侵食し、近代という歴史内部に誘い込む、先行する大文字の欲望が支配する圏域の外側へのベクトルをあわせ持つ、さらに言えば誘導するのである。大文字の欲望が不可視となり、「起源」が辿れないものとなり、差異化された象徴界が、シミュラクルの戯れと化す世界、また、脱中心性とアイデンティティーの解体がリベラル思想のすすむべき方向を示す標語と化したような世界にこのアーシュラの渇きを対置することで何が見えてくるのだろうか。

欲望充足が、「身体的」渇きと同義であるようなこの地平で、身体の空隙を埋めるものとして男女の空間が存在するわけだが、それは結婚という制度を通して、この「自然」を回収しようと目論むブルジョア社会と、その父親＝ファルスへの攪乱的運動へのベクトルを秘めた「自然」とが闘いを繰り広げる場でもある。帝国主義思想にそまった軍人でもある、シュペレンスキーとアーシュラの関係はアーシュラの空虚を充たすことができず、二人の関係は破綻するのだが、その二人がダンスを踊るシーンの背景に姿を見せる月に関して、寺田建比古の興味深い指摘を、『虹』の該当箇所とあわせて下に引用する。

たちまち二人は、一つの運動、一つの二重運動に化し去った（中略）彼の意志と彼女の意志とが、夢幻のような運動において、しっかり離れがたく結ばれている（中略）踊りが高潮に達するにつれて、アーシュラは、なにか彼女の胸をのぞき込んでいるもののあるのに気がついた。なにかが、あたしを見つめている。なにか力強い、輝く眼が、一心にあたしを見つめている。（中略）穴の開くように見られているのだ。はるかに遠くから、それでいて押し迫るように、射すくめるばかりの視線が、じっと彼女に注がれていた。音楽が止むと「月が出た」とアントンがいった。彼女は、振り返って見た。白い、大きな月が、丘の端からじっと見つめている。（『虹』中巻 222-223）

彼女の真正面に、白々と光る巨大なもの（中略）月が、明々と上っており、そこから、海の方、打ち見る世界の半ばにかけて、目もくるめくような白い光を、洪水のように押し流しているのだった。「なんてすばらしいの」（中略）彼女もまた、月光の方を指して、まるで光の中に溶け込んで行くように見えた。「ああ、わたし、行きたい」彼女は、烈しい、命令でもするような声で、叫んだ。「どこかへ行きたい。」（『虹』下巻、225-226）

月への化身という激しい意志は、言うまでもなく、近代的女性の自我の極限点への到達を意味する。

しかし、ここに注目すべきことは、彼女のこの意志の運動自体が、裡に重大な転換契機を秘蔵している点である。極限点へと達した自己主張は、同時に自我意識の次元から、原初的生命的次元へと反転して、自らに知られない「裸の自己」、本源的な「自己自身」へと轉身しようとする深い内的反転性の契機を秘め隠しているのである。月は彼女を生ける宇宙と接触させ、その根源である父なる闇への帰入の願いを激しく目覚めさせる

(寺田 479)

寺田のロレンス理解において、月の牽引力は自我の極へ向かう遠心的な働きとして捉えられるのだが、この場面に現れているのは、ラカン的言い方を借りれば、超越への渴望が、象徴界という自/他の差異化のダイナミズムのただ中に追求される、近代主義のパラドックスが露呈された原風景なのであり、そこに「マーシュ農場の神話空間は回帰する」のである。ロレンスのテキストの男/女のプライベート空間の背景には、つねにこの原風景が存在し、作用を及ぼす。寺田の言う「白い浮揚力」(西洋的自我意識のこと)と、回帰への願望、この一つの根から派生した相反する二つの力は、第一次世界大戦の影響をより色濃く反映し、「死の雰囲気」に覆われる、『恋する女たち』においては、エロスとタナトスの二元論的ダイナミズムという側面を強めるものの、『虹』においてそれは、歴史と神話を照らし出す、ヤヌス神的月として現われ、近代が背負う、根源的な生の矛盾を照らし出している。

近代の合理化に伴う脱魔術化過程の一つとして、科学主義の進行を捉えたとすれば、ロレンスと同時代人であったフロイトが生み出した精神分析学という「科学」は、その中に「物語形式」という再魔術化への回路を周到に用意することで、宗教なき時代の祭祀たり得たであろうし、事実、精神分析医は、宗教の時代において司祭が果たした役割を、現代において受け持つ存在と目されている。しかし、フロイト的無意識の発生源が、母親と父親をはさむ幼児期体験の抑圧にあり(ラカンの言えば、「現実界」に打ち込まれた「象徴界」

という差異原理により生み出されるということになるのだが)そこに措定される全体性、全能性は、幼児期の、あるいは母胎内での母親との身体的合一感覚である点は、フロイト的無意識の持つ射程と限界を理解する上で再確認しておく必要がある。母親(父親)をめぐる、父親(母親)との性的闘争関係と抑圧により生み出された欲求の海、という無意識のイメージはロレンスにとっては納得しがたい面を持っていた。彼は、フロイト的思考の中では、あまりにもすべてが「性」(つまり性の権力関係の中で生じる抑圧)に還元されていると述べている。

その個的な世界に閉塞された、無意識世界のイメージに対して、ロレンスの考えていた無意識とは、より“general”な“life force”との接触の場であり、一見、社会に対してプライベート空間を優先するかに見えるロレンス的特質は、この“life force”という神秘領域の回復という至上命題のもとに考えなければならないだろう。その成否は別として、彼にも次作『恋する女たち』においてすでに、男同士の結びつきに基礎を置く社会の建設という主題が芽生えたのだから。

そして、その近代主義の原風景との遠近法の中にマルキシズムやフェミニズムという政治運動を置いて考えたとき、それらの、女性性や集団性という“identity politics”を掲げ、抑圧された主体[集団]の開放を求める政治的叫びは、気づいてみると、その同一性に依拠することで、二項対立的近代の枠組みを強化し、その中に内属してしまう面をもっていたといえるかもしれない。その後、マルキシズム批評が脱構築を経、また精神分析理論を援用するようになり、フェミニズム批評も、それが前提としていた、生物学的性という本質原理/ジェンダーという構築原理の二項対立を突き崩すジュリス・バトラーのジェンダー理論に刺激を受け発展する。それは時代のメルクマールが、アイデンティティーや中心性、還元主義からアイデンティティーのゆらぎ、脱中心性、多元主義へと変化したポストモダン状況に適応するための理論的進化だったと言えるかもしれない。しかし、その近代—この言葉自体が、複数の時代的エート

スを含みながら、進行する歴史過程なのだがーの出発における原イメージをもつ『虹』が、時代のフェミニズムと共振しながら、思わぬところでそれをも相対化する「闇」のダイナミズムは、脱中心性と非同一性の問題を別の形ですでに提示していたともいえるのではないだろうか。そしてそれは、ポストモダンの言説の地平においてどのような有効性を保ち続けるのか。それについては、さらに三章においてさらに考察を深めたい。

### 三章 言語、そして語り

一般に、ジョージ朝に登場し、後にモダニストと呼ばれるようになった一群の作家が共有する問題関心の一つは言語をめぐるものだった。それは、エドワード朝の作家のリアリズム的作風に、ヴィクトリア朝時代の唯物主義的な負の遺産を見出したヴァージニア・ウルフの批判によって知られるように、内面重視、言語の自立性への関心という彼らが共有する一般的特質と結びついていた。ジョイスの言語実験を生み出したのも、一つには、言葉を生み出す原初的場をすでに汚染している権力関係への意識であったが、それによって生み出される過激なまでの言葉に対する破壊行為は、アイルランド復興運動には背を向けた芸術世界での自己救済の身振りとなる。しかしそのジョイスのモダニズムの芸術言語の精巧に織り合わされたテキスト世界に、末期のヨーロッパに生まれた、「老いた赤ん坊の顔」を見たロレンスにとって、そこに表出されるべき、いわゆる「内面」は、孤独に閉じこもった主観内部において芸術家の自我意識が織り成す、際限のない夢などではなかった。

その「自律性」をもった内面とは、男女の関係という、もう一つの権力関係の場のただ中に見出されるべき生命の回帰、あるいは神秘の領域だった。もっとも、自律性と自由の宿る個人という聖域を信じる、リベラル・ヒューマニズムを攻撃し、その歴史的構築性を暴露するフェミニズム他のイデオロギー批評の視点からは、男女の特権化された空間にも、先回りした父権性イデオロギーの底意が読み込まれ、批判対象となることは容易に想像がつくことであり、それに関しては、すでに第

二章でふれたとおりである。しかし同時に、その空間の中においても、自我という牢獄の堅牢さを、逃れられない呪縛として、もっとも痛切に感じていたのもまたロレンス自身であり、彼の書簡が示すように、ロレンスは二十世紀ヨーロッパに生きる人間が、**primitive** に向かって歴史を逆行することの不可能性をはっきり自覚していた。そのようなパラドクスを生きたロレンスにとって、自我を越え出る、すなわち、西洋的自我と **primitive** を架橋しようという実験は、実人生においてフリーダとの関係において追求される課題であり、その実体験を拠点としながら生み出された彼の作品群において、それは、言語のレベル、語りのレベルにおける二重構造としてあらわれる。**Salgado** は『虹』における語りの特徴として、リアリズム言語、象徴言語による二つのモードが混在していることを指摘し、それぞれが **linear** (=直線的)、あるいは **cyclic** (循環的) な時間の流れに対応していると論じている。

There are two basic narrative patterns in *The Rainbow*, a linear one concerned with development in time, with one character giving place to another as a center of interest against a background of change in milieu and circumstance, and a cyclic pattern in which each character undergoes the same struggle for fulfilment, for an adequate relationship between himself and herself and another and with the circumambient universe. (*D.H.Lawrence* 111)

“linear” な語りのパターンにおいては、歴史的進展の中で、焦点となる人物が入れ替わりプロットが展開するが、その時間軸の中で反復的に前景化される男女のプライベート空間の描写は、言語のレベルで捉えた場合、しばしば時や場所へのレファレンス、あるいは行動への理解を支える心理主義的動機の不在などに特徴づけられ、従来のリアリズム伝統からははずれたものであることが分かる。それは、十八世紀以来のイギリス・リアリズム小説の伝統において描かれてきた家庭劇などの中ではうかがい知ることのできなかった、両

性の関係の深部で動く衝動を、“circumambient universe”との関わりの中で啓いて見せる。それは性を抑圧するブルジョア規範や、それと裏腹の、搾視症的願望とは全く異質の視点から試みられる両性の関係の探求なのである。この衝動は、世代を超えて、「社会条件」の進展変化が生み出す linear なラインとの接触面から、そのつど、新たに、立ち上がり、回帰する。

ロレンスの登場人物がとる行動の中で、人間関係の展開や破綻、自己発見、などが生じる決定的瞬間の多くは、そのような心理主義的リアリズムの欠如を示すかのように、“suddenly”や“some-how”などの副詞を伴いながら描かれるのだが、それとともにロレンスのモダニズム言語は常に、二章で論じた月の存在に象徴される、背後に存在する自然の作用の上で考える必要がある。彼の文体が、原始的太古のリズムや、儀式性を帯びる (Salgado) のはそのためである。それは、表象・再現的な象徴言語、つまり、自然を指し示すと同時に、自然でもある言語なのである。ロレンスが小説に求めた可能性は、このように、社会や歴史を表象する、リアリズムという referential な語りと、自然、神話を表象・再現する symbolic で incarnate な言語形式により、語りそのものの内部において、両者の間を架橋することだった。「何を語るのか」ではなく、「いかに語るのか」に関する、自意識的な試みへの可能性を秘めた—このような言い方は、クリスティーバの女性言語についての問題意識を連想させるかもしれないが—「小説」というジャンルは、また「歴史」において「何を語るか」が、「どのように語るか」というテーマに接続できる特権的形態でもあった。そこで重要なことは、「ジェンダー」や「階級問題」を語ることが、近代性の根本的矛盾を語るように語られること、言い換えれば、それら前時代における「闇」を語ることが、語るという言語行為の中で近代性の枠組みの中に内属し、「去勢」されないように、近代性そのものを脱構築する行為の中で、生命という「闇」の領域を提示することだった。それは、ちょうどフーコーが、理性の統制をのがれ出る「狂気」という領域を、どのように理性中

心主義に陥らずに書くかという問題意識のもとで『狂気の歴史』を執筆したことと相似形をなしているといえるかもしれない。以上のように、小説は近代において分裂した、心理と深層心理、歴史と神話などのカテゴリーに架橋する可能性を秘めた芸術形態としてロレンスにとって特別な意味を持っていたのである。

本章の最後に、ここまで論じたロレンスの「自然」のほぼ同義語として、ロレンスがしばしば言及する、“non-human”という言葉—彼は友人宛ての書簡で、『虹』を執筆するにあたり、『息子と恋人』の手法を捨てたことを語り、自分の関心は今回 non-human なものに向かい、そのため登場人物の造型をまったく別の次元で行うことになったと述べている—を、近代ブルジョア主体が対象化＝支配しようとする行為をすりぬけ、外部 (alien force) として反対にその主体を疎外し脅威を与えてくる可能性を秘めた力や神秘領域を示すものの総体として拡大解釈した場合、このシニフィアンが照らし出す歴史内部の主題系を考察の対象とすることで、言語の問題へのヒントを探してみたい。それは第二章の終わりで述べた、脱中心化の流れの中で生まれてくるさまざまな言語、思想の中で、ロレンス的な脱中心性、脱構築性の持つ特徴を照らしだしてくれだろう。

ブルジョア主体の外部にあって、それを相対化する (潜在力を持つ) ものとして考えたときに、“non-human”は、一つには、その主体が依拠している、「物」/「もの」などからなる歴史条件の自立性 (= 歴史の変動性) として捉えられ、また他方では、社会の中において、その主体から囲い込まれた民族的、またジェンダー的他者、さらには、文明/野蛮という枠組みの中で啓蒙の対象として外側に締め出され、同時に西洋的主体の実質的内容の確定に供される非西洋社会—それらはしばしば悪魔化された形でテキストに登場し、支配者のイデオロギーを強化してきた—のことでもある。そこに一貫する対象化のまなざし、支配と統御への姿勢は、まさに近代自然科学が自然に対して示してきたものでもあった。

そのようなブルジョア近代を特徴付ける、知と

権力の結託の中で、対象化＝支配されてきた外部は、その後、ブルジョア主体の支配を転覆させる、あるいはその内部へと侵入してくる脅威として立ちはだかるだろう。Ian Watt が *The Rise of the Novel* において明らかにしたように、もともと小説という表現形式そのものが、物質主義を特性表示の一つとして成り立っている、ブルジョア階級の勃興と密接に結びついていたわけであり、そのリアリズムを支えるものは、一つには人間の内面＝ego と、社会の中の「物」/「もの」（物と生産手段、階級、ジェンダーなどの中に配分され割り当てられた、社会コードのネットワーク）の間の安定した関係および、それに対する共通理解にあったと言ってもよい。そして、重層的な意味作用の中に成り立つ、テキスト世界は、「物」/「もの」の観点から見た場合、ブルジョア社会の繁栄とステイタスを示す目録の品々―土地や財産、商品や女性など―の交換・流通を前提として、そこに生み出される、公私の領域での人間関係の構築/更新と、それを取り巻く、モラルや *decency* というイデオロギーの系が親密で不可分な関係のもとに支えあう構造をもっていた。

しかし、そのように「物」/「もの」の関係、また「価値」や「モラル」などの社会コードが、「内面」と矛盾なく有機的に結びつく世界と、それを成り立たせている特権的視点から疎外・抑圧されていた歴史的潜在力は、その視点が普遍的なものなどではまったくなく、白人、ブルジョア・ヘテロセクシャル・男性中心的な歴史的構築物に過ぎなかった事実を暴露し、それを歴史の内部に差し戻そうとする、新しい力としてやってくるだろう。その過程において、生産力の変化は新たな生産関係を要求しながら、ブルジョアという一階級を地上から取り除く弁証法を歴史の自律性＝必然性の中に生み出し、社会革命へ向かう自由へと、プロレタリアートを誘うことになるだろう。またフェミニズムは、ブルジョア主体の父権性イデオロギーに立ち向かう、言葉を獲得した「他者」として、さらには、「野蛮」という、外部の非西洋社会に排除したはずの他者は「理性」や「合理性」を脅かす内なる他者として西洋内部に侵入してく

る。なぜならフロイトによる無意識という広大な大陸の発見は、全ヨーロッパ規模での野蛮な破壊行為をもたらした第一次世界大戦という歴史的事件の衝撃とあいまって、十八世紀の啓蒙主義歴史観から十九世紀ランケに確立される歴史主義を通して、いやその後のマルクスによる唯物主義的歴史観を通じて温存されてきた、高い進歩段階にある西洋社会対、後進、停滞段階にある非西洋社会という二項対立的構図の根本的枠組みそのものを崩し去り、野蛮と文明が、地続きとなるような大変動の時代をもたらしたのだから。

しかし、自然権と理性的主体という近代的アイデアから出発し、語り継がれてきた、リベラルヒューマニズムという理想、自由な行動主体という神話、そしてそれを前提として発展してきた資本主義というシステムは、それらの *non-human* な諸力の脅威にさらされながらも、巧妙にそれら「外部」を取り込み、利用することで生き延び、進化を遂げてきたとも言えるかもしれない。

事実、「無意識」という、発見された新大陸は、脅威であるとともに、沈滞したヨーロッパ社会の新たな活性源という意味も持っていた。また、冷戦時代の仮想敵である社会主義陣営との闘いで勝利を収めたのは、資本主義が結果的には、「無意識」という外部を、社会の再生産のために巧みに手なづけ利用するための、より適した幻想のシステムを提供できたことの証しとも考えられるだろう。また『虹』の小学の描写にみられるような、強権的で、直線的、一枚岩的な権力の姿は、より懐柔的なヘゲモニー―これを、イーグルトン風に、権力が演じるジェンダー的異性装といっていけないであろうか―へと姿を変え、「自由な個人」という夢を紡ぎだし、温存することに成功している。

ポスト・モダンの D.H. ロレンスについて語ることは、そもそも、脅威であるとともに、そこに新しい活性をももたらしてきた、*non-human* という外部が見えにくくなり、あるいはジェンダー的、民族的マイノリティーの *identity politics* を掬い上げ、包み込む形で、民主主義という不可侵の審級がグローバルな原理として強化され、世界を覆う時代、そして内/外、オリジン/コピーとい

う対立軸が融解し、欲望が脱コード化され、疎外と充足の間を巡回しながら反復・再生産されていくような地平にあって、もう一つの反復を考えることであり、同時にそれは人間と人間のつながりの回復というテーマと密着している。

十九世紀の父権ブルジョア産業社会の時代に変革をもたらすような思想を提供した、マルクス主義、精神分析、フェミニズム理論は、その後、構造主義の洗礼を受け理論的に進化し互いに補完、融合することでそれ自身が一種の **universal** 化を経て、多重決定性や、脱中心性、偶有性、を標語とする、情報化、グローバル化されたポストモダン時代の諸現象を、分析するのに、より汎用性の高い理論的武器となっている。その中で、ロレンスのテキストの言語や語りについて考え、その自己抹消性や、テキストの脱構築性を取り上げる場合に、あくまでも言語優位的な分析の中で、それらを現象させた、背後のものへの視点を忘れては、ロレンスのテキスト読解を、ポストモダンの諸言説の再生産に流用しているだけだということになってしまいかねない。「作者の死」という、しばしばあまりにも無批判に言及される神話をアリバイに、ロレンスのテキストを解体するのではなく、ときに苛立たしげで、ヒステリックにさえ聞こえるロレンスの言葉の背後にあるロレンスの身体への想像力、それが、新しいロレンスの読解にあたり、再び必要となるのではないだろうか。そこにロレンスの神話的源泉から、今日的な問題に接続できる、何らかの知恵を探しあてること、それは、ポストモダンの空間の中に、もう一つの反復の糸を導き出す、言語的課題として、残されているのかもしれない。

## 結論

『チャトレイ夫人の恋人』冒頭に、「現代は本質的に悲劇の時代である」ということばがある。その悲劇感覚は、近代の出発点への強い意識に裏打ちされている。ロレンスのテキストは、そして、歴史意識はその悲劇感覚を抜きにしては語れないものである。本論稿において、社会史の記録という体裁をとって書かれた、『虹』を取り上げ、第

一章においては、そこに現れる歴史性を時代状況の中に置きなおすことで、マルクス主義批評がイデオロギーとして切り捨てるテキスト内の神話空間こそが、近代以降の進歩主義的、あるいは科学主義的歴史記述の中に侵入しそれを攪乱する、ダイナミズムの源、さらにいえば、始原への問いの源として存在し、それが男女の葛藤と結びつき織り成すプライベート空間において回帰する点を明らかにした。第二章では、アーシュラの成長物語において、対抗的、政治的読解をその内容とするフェミニズム的視点をさらに進め、アーシュラの身体的「空虚」を、近代的地平を超えて、ポスト近代の世界を先取りし照らし出すもう一つの脱中心化の淵源として考察した。第三章では一、二章で論じた内容をふまえ、ロレンスのテキストにおける言語、語り、さらに小説ジャンルの持つ意味あいを考察し、さらに近代からポスト近代への流れを **human/non-human** の弁証法という観点から振り返りながら、ポスト近代における、ロレンスの身体言語が持つ反復の潜在的可能性とその位相を考察した。

資本、人、もの、情報が国境を越えて飛び交い、全面的に開放された欲望の追及を是とするところに成り立っている、アメリカを発信源とするグローバリズムに覆われた今日のポストモダン社会において、外部を語ることは難しい。そこにおいて、欲望は、他者の欲望を欲望するという鏡像的循環の中に取りこまれ、消費も他者の消費を反映した他律的なものとなる。権力の姿も、一方で、情報、イメージ、資本、などの中に分散化されてグローバル市場、巨大化するメガ・メディア市場の中に浸潤し、他方、ナショナリズムとグローバリズムは対立/補強という関係のうちに支えあい、また社会内部の矛盾や亀裂は、民主主義という現代の超越審級へと吸い上げられ、それを強化する。ファルスは、可視の実体であることをやめ、無意識世界の消失点として欠如の中にとどまるので、それは文字通り **“untouchable”** な審級なのである。ポストモダンという「悪」夢の空間とはこのようなものである。

それはすでに外部も「大きな物語」も欲してい

ない世界なのかもしれない。そして、このパラドクスを悲劇として受け止める感性は、おそらくポストモダンには不似合いなものだろう。なぜなら、そこでは、欲望の起源は、近代の出発地点にあった絶対の残影（二章で論じた月はそれを暗示するわけだが）などその片鱗も残さないまでに、断片化し分散化し、それに対するノスタルジアもまた死滅しさったかのように見えるからである。

シミュラクルが、本体を持たない影として浮遊する閉じ込められた内部の中で、人間の消費活動も、欲望の表現も、さらにはことばも、方向性と全体性を持たない、ミメトリカルなグローバル空間で交換され、流通する、差異化された記号の戯れと化し、わたしたちは自由と繁栄の幻想の中で百年の孤独を生きるのかもしれない。

ロレンスのテキストにおいて特権的な場所を与えられている、男/女のプライヴェート空間もまた、交換可能なシミュラクルと化したかのような感のある現代の世界において、ロレンスの自然が回帰する場とは、どこだろう。あるいは、そこで想定される、外部とは何だろう。西側メディアが悪魔化されたイメージで語り続け、軍事産業の存続理由として、また石油利権と民主主義の拡大のために利用される「イスラム」という、擬制された外部なのだろうか。あるいは、イスラム世界の真の姿を理解し伝えようと、危険を顧みず、そこに向けて、越境を試みる、善意の人々のヒロイックな行動などに姿をあらわす、市民の姿なのだろうか。あるいはそれはまた、環境問題として回帰する、外部としての自然—言うまでもなく、自然科学が脱魔術化した操作可能な自然ではなく、取り扱いしだいでは、すぐに人間の存続そのものを左右する力を持ったものとして、今日迫ってきている、恐怖の対象でもある自然—なのか。

本論稿で論じた、「回帰する自然」も、実はロレンスにとって、人間と人間の間の橋渡しという課題とともにあったのであり、同時に、ちょうどエリオットにおいて、伝統が発見されるべきものであったのと同様、自然の回帰は、人間の自由意志のなかに実現されるべき自己否定を伴う課題でもあったのである。そのように考えたとき、それ

はまた、ポスト近代の時代にあっても、シミュラクル化し、実体感を失って行く他者との間に、どのようなつながりの糸を発見していくかという課題を中心とした自由と反復への促しとも読めてくるのである。

#### 参考文献

- D.H.ロレンス 中野好夫訳 『虹』（上、中、下巻）1957 新潮社
- D.H.ロレンス 小川和夫訳 『無意識の幻想』 1957 南雲堂
- エドワード・サイード 大橋洋一訳 『文化と帝国主義』（1・2）1998 みすず書房
- エリック・ホブズボウム テレス・レンジャー編 前川啓治 梶原景昭他訳 『創られた伝統』1992年 紀伊国屋書店
- ケイト・ミレット 『性の政治学』 藤枝滂子訳 1985 ドメス出版
- ジョン・ミドルトン・マリ 戸田仁編訳 『D.H.ロレンスの思い出』1998 西日本法規出版
- フレデリック・ジェイムソン 大橋洋一他訳 『政治的無意識』1989 平凡社
- 寺田建比古 『「生けるコスモス」とヨーロッパ文明』1997 沖積舎
- 大平章他編 『ロレンス文学感小事典』 2002 彩流社
- Lawrence, D.H. *The Rainbow*. New York: Oxford 1997
- Lawrence, D.H. *Women in Love*. New York: Oxford 1997
- Alcorn, John. *The Nature Novel From Hardy To Lawrence*. New York: UP of Cambridge 1977
- Becket, Fiona. *The Complete Critical Guide to D.H. Lawrence*. London: Routledge 2002
- Beynon, Richard. *D.H. Lawrence The Rainbow Women in Love*. Cambridge: Icon Books Ltd, 1997
- Eagleton, Terry. *Figures of Dissent*. London: Verso, 2003
- Mark Kinkead-Weekes, "The sense of history in *The Rainbow*", Peter Preston, Peter Hoare eds, *D.H. Lawrence in the Modern World*. London: Macmillan, 1989
- Marsh, Nicholas *D.H. Lawrence The Novels*. Houndmills: Macmillan Press Ltd, 2000
- Salgado, Gamini. *D.H. Lawrence*. Harlow: Pearson

Education Ltd, 1982

Siegel, Carol. *Lawrence Among The Women*.

Charlottesville: UP of Virginia, 1991

Smith, Anne ed. *Lawrence and Women*. London: Vision  
Press, 1978

Widdowson ed., *D.H.Lawrence*. London: Longman, 1992

(2009.10.5.受稿)